

友人の死と WTO 世界会議

コヘレトの言葉 4:1-3

賈 晶淳

世の中いったい何事が起っているのか。本当の事実というのはどういうものか。情報が多く氾濫している時代でありながら逆にそれらが私たちの判断を紛らわしくしている。ある程度の判断力を持っていないと情報の是非をわきまえることが出来ない。その上、マスコミも本来の言論や表現の自由が権力や資本によって影響され偏頗的な報道をすることも多いのが現状であろう。今更と言われるかも知れないが、最近とある事件でマスコミの現状の一部を体験することができた。

さる9月10日にメキシコのカンクンでWTO(世界貿易機構)世界閣僚会議が開かれた。日本からは外務大臣や通産大臣も参加した。同時にカンクンには世界中から多くの農業関係者が集まり、WTO 会議で決めようとする内容を撤回することを要求する集会を開き、デモ行進をしていた。そこである韓国の農民代表が刃物で自分の胸を刺し、抗議自殺をする事件が起きたのである。その事件は直ちに世界中のマスコミによって報道されたが、何故か日本のマスコミは全くと言える程この事件について報道することがなかった。世界閣僚会議には日本の外務大臣や通産大臣も出席していた。それに会議の内容には農産物の関税の引き下げなどが扱われていた点から考えると全く無関係であったとは思われない。私とその抗議自殺の事件を知ったのはその翌日に韓国のインターネット上の新聞を通してであった。李京海(イキョンヘ)。もう一度確かめて見た。間違いなく私の友人であった。大きな衝撃であった。

彼と初めて会ったのは2001年8月下旬、台風の日の昼頃であった。当時の日本キリスト教協議会の総幹事の天津健一牧師からの電話連絡があり、霞ヶ関の第二衆議院会館前駆けつけたところ、激しい雨の中に彼は抗議の座り込みをしていた。日本語を全く喋れない彼は座り込みのための全てのものを一人で用意し、小泉首相の靖国神社参拝やつくる会の教科書検定に反対する内容を書いた横断幕を衆議院会館の外側壁に掛け、座り込みのハンストを29日間行ったのである。その間、私はほぼ毎日の夜遅い時間に、時には当時小学校六年生であった息子と一緒に訪ね、その日の韓国の新聞を持って行き、彼の韓国語の話の相手となり、いろんな事を学ぶことができたのである。ど根性の人であったが、それこそ彼の魅力であって、しかも彼の優しい顔の表情は今も心に深く残っている。韓国に戻られた後にも何度もの電話を頂いたことがあり、互いに多忙な関係で一度だけソウルで夜遅い時間にお会いしたことがある。30分位であったが、そのため全州という300キロほどを車でやって来たのである。彼は当時、韓国の全羅北道道議会の議員であった。彼は農民出身であり、農民運動家として全国規模の農民団体を作り、その農民によって選ばれた政治家の一人であったのである。そう意味で彼がカンクンに行って抗議をしたのは当然のようなことであった。

WTO の世界閣僚会議では何のための会議であったのか。何故、各国の外務大臣をはじめとする閣僚が参加したのか。そして、彼は何故そこで死ななければならなかったのか。世界中の閣僚が参加して行われたという点で、重大な会議であったのを推測するのはそれほど難しくはない。一言で言えば、WTO 閣僚会議は「世界支配システム」を作る会議であった。世界支配システム作りというのは大げさな表現のように見えるかも知れないが、植民地時代や冷戦の時代が終り、今は武力による時代ではないと言いつつも結局イラクを侵攻・支配しているのはその武力である。そしてその後ろには支配的資本主義構造がサポートしている。グローバリゼーションと言っていることも実際には世界の経済構造を再構築し、どの国においても資本が自由に出入りするようなシステム作りだと素人でありながら思っているわけである。その代表的なことが「ウルグアイラウンド」であり、そのようなシステムを作るのがWTOの役割なのである。誰のためかと言うのは言う必要もないだろう。

1986年にウルグアイでのGATT(関税および貿易に関する一般協定)閣僚会議で交渉が始まり、1993年に合意に達した事によってWTO(世界貿易機関)が設立されることによって終了されたことである。つまり、ウルグアイラウンドの成功によってWTOが誕生したのである。その大きな内容は農産物の関

税化(他 22 項目)ということであった。李さんは 1990 年にジュネーブでウルグアイラウンドを抗議して割腹したことがあり、その傷を見せてもらったことがある。

今回の会議内容の中にも農産物貿易に関する条項が入っている。例えば、日本はお米に対しての関税率をこれまで 490%にして国の主要穀物であるお米の生産農家を保護してきたのである。それに対して WTO では関税率の上限を設定したいということであり、全農産品に対する関税率を 25%以下に下げることが提案していたようである。それに対して、ブラジルやインド、中国などの 21 ヶ国が先進国の補助金撤廃や市場開放を求める対案を共同で提出している。補助金というのは先進国が自国の農業を保護するためのものである。例えば、米国の 1999 年の農業補助金は 1 兆 8 千億円。EU は 5 兆 8 千億円に加え輸出補助金として 56 億ドルを払っているようで、日本の場合は 7 千 5 百億円を払っているそうである。この補助金制度については先進国内でも批判が高まっていて、アメリカ NGO のコメントでは「豊かな国の農家に払われる補助金は、1 日 1 ドル以下で暮らす世界の 12 億人の所得合計を上回る」という批判であり、WTO へ関税引き下げの働きかけをしている構造についても説明している。「2002 年の米国の農業補助金の 65%に当たる 78 億ドルが企業を含む上位 10%の大規模農家に払われ、一方、農業ビジネスからの政治献金が 1992 年の 3 千 7 百万ドルから 2002 年は 5 千 3 百万ドルに膨らんだ。大規模農家と貿易企業、政治の結びつきが見える。その標的が途上国市場だ。」ということであった。

前回の WTO 会議は 1999 年 11 月の末にアメリカのシアトルで開かれたが、この時にも多くの人々が WTO の政策に反対する集会を開いて、結局決裂に至ったのである。それについてはノーム・チョムスキが『グローバリズムは世界を破壊する』で 1 章を設けて書いている。今回の WTO 会議も李さんを始め多くの人々がカンクンに駆けつけ抗議をすることによって決裂した。このような先進国による世界支配システム作りの作業はずっと続くであろうし、同時に世界の民衆の戦いも終わらないだろう。

ドイツのフランクフルト学派の社会哲学者であるユルゲン・ハーバマスは 1968 年にまとめた論文集の『イデオロギーとしての技術と科学』という本の解説の最後のところで岩崎稔氏が WTO のシアトル会議の反対行動を「反システム運動」として書いており、それはハーバマスの後年に使っていた表現として「システムによる生活世界の植民地化」に対する新しい動きであると紹介している。

それに対して貧困の経済学を主張してノーベル賞を受賞したアマルティア・センというインド人経済学者がいる。彼の文章の中にグローバリゼーションについて書いたところがあり、「グローバルゼーションに対する抗議のかたち自体も、グローバル化しつつあります。」と言いながら、「グローバルゼーションの反対側に位置するのは偏執的な分離主義者頑迷な経済孤立主義です。」(『貧困の克服』145 頁)と書いている。全く門外漢でありながらこれらの文章を読んだ時、貧困の経済学者として WTO の政策をどの立場から考えているのかが疑問であった。

コヘレトの言葉の著者は世界の矛盾も知っていたと思われる。聖書の著者は太陽の下に行われる虐げの全てを見た人である。「虐げられる人の涙」と「虐げる者の手にある力」を対比させて描いている。虐げの酷さとして、命がまだ終わっていない人、命を終えた人、更に生まれてこなかった人の順に幸福であろうと語っている。このようなことが現代の世界ではないと硬く信じている人はいると思うが、メキシコのカンクンでの出来事は何を意味していたのであろうか。そして李京海さんの死は何を意味したのであろうか。農民をはじめ世界で抑圧され収奪されている民衆の思いは「虐げられる人の涙」として聖書の著者は表現していたのであろう。「虐げる者の手にある力」をもって自分自身のため原理原則を作り、システムを作っている人々が片方にある。律法主義者であり、自分の救いしか考えていない多くの人々であろう。(第 158 号・2003. 9. 21. 証詞より)